
怠情少年期

晴英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怠惰少年期

【Nコード】

N0189J

【作者名】

晴英

【あらすじ】

アホな高校生4人が、毎日しょうもない事件をひきおこす…
バカなことで必死になって、それでも僕らなんとか楽しく生きてます！

煙草片手の日常コメディー、ときどきちよつとした恋愛事情も展開中。

いかに楽しく生きていくか。(前書き)

赤いマルボロ

Seven Stars の 14 mg

赤のラッキーストライク

中南海ときどきマルボロメンソールライト

癖があつてなんぼ。

煙草はおやつです。

しょうもないっていうな。

僕ら必死に生きてます。

いかに楽しく生きていくか。

1 .

高校に入ってから、コロッケパンを食べる機会がめっきり減った。中学の頃は学校に売りにくるパン屋さんの商品の中ではコロッケパンが一番すきで、ほぼ週3ペースで食べていたものだが、最近では全くと言っていいほど口にしていない。

その主な理由は、高校の食堂のコロッケパンには余計なドレッシングがかけられているからというのと、更にわたしがラーメンという贅沢品の味を覚えてしまったから、ということである。

決してコロッケパンに飽きたわけではない。

聞けばちかごろどのコンビニのコロッケパンにもマヨネーズやらドレッシングやらがたっぷりかけられているそうじゃないか。わたしはどうしてもそれが許せないのだ。

何度も言うが、本当にコロッケパンに飽きたわけではない。

ドレッシングでべちゃべちゃにされたコロッケパンの現状を嘆くわたしに、ラーメンが甘く囁いただけだ。

しかし高校の食堂のラーメンはなかなかおいしい。

もう食堂に通いつめて2年になるが、入学当初から変わらぬ味・値段、気付けば週5でラーメンの時もあった。

（コロッケパンの時といい、なんて偏食だろう）

そんな生活ばかり繰り返したものだから、今日のような、ラーメン売り切れ、の文字はひどくこたえる。

ちょっと待ってくれ。

委員会で遅れちゃったんです。でも今日は朝からラーメン食べようと思って学校来たんです。

ラーメンなかったらわたしはなにを食べたらいいんですか。

朝起きたときからラーメンを食べるつもりでいたのに今更カレーパンなんて食べられません。

お願いします、ラーメン作ってください。

本当にどうしたらいいんですか。

ラーメン、わたしのラーメン。

いくら哀願しても無いものは無いのだ。

大きく息を吸い込んで、そのまま食堂を出た。

吸い込んだ息を漏らさないように東校舎の屋上まで駆け上がる。

錆び付いて、あける度に大きな音を立てるドアを少し荒っぽくあけると、ドアの小さな枠の向こうに白い空がひらけた。

てっきり青い空が見れると思っていたわたしは、思いがけない白さに、ため込んでいた息を少し漏らしてしまった。

なんだ、と思いかけた時、視界が明るくなって、見たかった空が顔を出した。

大きい雲が通りすぎるところだったらしい。

それに安心して、貯水タンクの裏の、ほどよく日の当たる場所まで歩いた。

実はよくくる場所だ。

ほかの誰にも教えていない。

このひだまりは、わたしのものだ。

タンクにもたれて、隠していたコーラの空き缶を引っぱり出した。妙な重量があるとおもったら、だいぶと灰がたまっている。

うそだろう、だって3日前に缶を変えたばかりなのに。

おかしいな、とおもいつつも、今現在問題はないのでそのままコーラの缶を右側において、セブンスターに火をつけた。

ヤニ臭い匂いが瞬間鼻について、それをそのまま肺に押し込んだ。その間も煙はゆらゆら空に上った。

口から煙を漏らすと、それもゆらゆらゆら飛んでいった。

昼ご飯を食べ損ねたお腹が派手な音をたてる。

仕方ないな、今日はもう食べないでいいや。

少しでも空腹を紛らわすために煙をむさぼる。

肺に入れて、出して、そうすれば少しの満足感がうまれる。

癖のある匂いがカッターシャツに染みこんでいく。

屋上から見るさわやかな空色と不自然な煙が溶け合う絵はシユールだ。

この上なく贅沢な景色。

きつとこの贅沢を知ってる人間は少ない。

わたしは間違いなく、しあわせもの、だ。

こみ上げてくるあくびを噛み殺すのは好きじゃない。
くあっと大口で酸素を取り込んだ。

途端に、ガタガタと音がした。
タンクの向こう側だ。

うそ、まずい、

あまり意味はないのに体を縮こまらせた。

「あれ、缶ない。」

どこやったかなあ、とごそごそタンクと壁の隙間を探っている。

その間においとましようと、低い体制のままごそごそ動いていたわ
たし。

本当に今日は厄日だ。

鞆の紐がコーラの缶をひっかけたようで、見事な音を立てて缶が倒
れた。

缶の上に乗せていた100円ライターももちろん放り出されて、二
段階で音をたてた。

飲み口からはたまった灰がこぼれた。

コンクリートに散らばった灰を片付けるのは面倒だ。
それ以前にもうこれ見つかったら言い訳できないな。

「缶そつちか。」

声の主がこっちに回ってくるみたいだ。
もういいや、と思って、最後の一本のセブンスターを取り出して、
放り出されたライターを拾って火をつけた。

ひょこつとタンクの横から顔を出したのは、藤澤くんだった。

「あれ、浅木さんセブンスターなんだ、意外。」

藤澤昭仁、同じクラスで保健委員でも一緒。

しまった、よりもよって藤澤くんに見つかった。
と、思ったら、なんか、違う。

よっこいしょうたろう、とわたしの横に腰をおろすと、ズボンのポケットから小さい箱を取り出した。
赤のラッキーストライクだった。
それから胸ポケットを探ると、やべ、と小さくきこえた。

彼になにがおきているかはだいたいわかる。

「あの、火つかう？」

「つかうつかうつかう！」

勢いよく何度も頷いて、

それでもわたしが差し出したライターは、丁寧に両手で受け取って、

ラッキーストライクに火をつけた。

慣れた手つきだった。

「灰落ちてるよ」

ラッキーストライクをくわえた彼が少し慌てて言った。

気づくとわたしの最後の一本はほとんど灰になっていた。

コンクリートには、さっきぶちまけた灰に加えて、今落ちたものが散らばっていた。

もったいないな、とコーラの缶を立たせて、短くなってしまったセブンスターを押し込んだ。

その間も藤澤くんはおいしそうにラッキーストライクをくわえてい

た。

もしかしたら彼にとって煙草はおやつなのかもしれない。

セブンスターよりもよっぽど癖のある匂いに、吸ってもいないのに酔ってしまいそうだ。

「浅木さんいつからここ使ってる？」

彼のその質問には、俺の場所とりやがって、みたいなことが含まれているんだろうか。

でもどうもそんな言い方ではない。

一年前ぐらい、と答えると、僕もそれぐらい、と返ってきた。

「なんで今まで会わなかったんだろうね。しかも同じ缶使ってるし。」

コーラの缶の中の灰は、藤澤くんのだっただけらしい。

「ごめん浅木さん、もうひとり来るんだけど、いい？」

彼のラッキーストライクをじっと見ていた私が、いいよ、と答えるのと、錆び付いたドアが音を立てるのはほぼ同時だった。

ぺたぺたとサンダルをひっかけた足音がとまると、また見覚えのある顔があった。

「なんだ、浅木も一緒だったのか」

先に口を開いたのは沖田だった。

斜め掛けにしていた鞆を取って、藤澤くんの隣に座った。

「沖田、260円」

わたしの言葉に、沖田はあり得ないほど顔を歪めた。

「お前、あれぐらい奢れよ」

「借りるって言ったのはあんただろうが。」

けち、と小さな悪態について沖田はポケットをまさぐった。

実は、沖田とはもう半年ほど、この場所を共有している。

最初はこの場所は俺のだと言い張る沖田に再三立ち退き命令を出されたが、頑としてわたしも退かなかった。

こんなに気持ちいいひだまりは他にはないのだ。

そのうち言い合うのも面倒になってきて、一緒に使うことにした。よく考えれば最初からそうすれば楽だったのに。

それから数え切れないほどここで一服したりしているのだが、大概わたし一人で、一緒になるとしてもせいぜい沖田が一つ下の吉田くんだったから、てっきり煙草族はわたしを含めて三人だと思っていた。

まさか藤澤くんもそうだったとは。

いや意外。

きつとわたしが知らなかったただけだろうけど。

でも藤澤くんっていったら、具体的なイメージが浮かばないから。どこでどんなことをしてるかも見当つかない。

だからこそ、そういう彼に興味がわくのだ。

もしかしたら彼がお箸を持つのを見るだけでもわたしは不思議に感じるかもしれない。

そついやひとつだけ彼についてわかってることがある。

藤澤くんは焼きそばパンが好きらしい。

それもわたしのラーメンやコロッケパン並みに。

わたしがそのことを知っているのは、彼が食堂で焼きそばパンを頬張るのをよく目撃するからだ。

「あれ、2人ともだち？」

珍しく驚いたような顔をして、藤澤くんが言った。

わたしがうん、と答える前に、沖田が無言で頷いた。

「そっかそっか。沖田から浅木さんの話は聞いたことなかったから、知らなかった」

「別に話すこともねえだろ」

「吉田の話はするの？」

「なんかそれ俺がキモチワルイ感じな言い方」

沖田がばらばらと藤澤くんのスリッパにわたしがぶちまけてからほったらかしにされていた灰を降らせた。

藤澤くんがさつと払うとまた同じところに新しい山ができる。地味だがたちの悪い嫌がらせだ。

それでも藤澤くんは笑顔を絶やさない。

いつもそうらしいが、絶対に怒らないし泣かない。

それは、実は彼はどこぞのお釈迦様で、悟りをひらいていらっしやるからだというありがたい説もあったぐらいだが、それはいくらなんでもないだろう。

ただ彼のそういう穏やかで密やかな雰囲気と、ラッキーストライクの匂いはとても合っているとおもつ。
癖があつてまつすぐ。

手招きするのに、何も掴ませない。

ほんの一瞬、

まるで彼自身が、その煙草のようだと思った。

わたしにきつちり260円を返済して、ひとしきり文句を並べた後、
沖田は藤澤くんの向こう側に腰を下ろした。

カチ、と聞き慣れた音がして、それからすぐ新しい煙が上った。

ラッキーストライクの匂いにやっと慣れたわたしの鼻を殴るような、
あくの強い匂いがする。

わたしがこの匂いに耐えきれなくなるのと、
くせえ、と吸った本人と藤澤くんがばやくのはまったく同時だった。

「柊、臭い、あっちいけ」

あからさまに迷惑そうに鼻をつまんで、ぺっ、とあっちいけの手振りをする藤澤くん。

なんでだよ、とにやけながら近づいてくる沖田。

冗談にしろ本気で臭い。

「何吸ってんの、それ。」

そう聞くと、沖田はポケットからひしゃげた箱を取り出して、別に普通ですけどね、と見せた。

いつもの赤マルだった。

だったらなんで、と口を開こうとしたとき、沖田の後ろから知った顔が出てきた。

「すみません、臭いの俺です。」

吉田くんだ。

彼の胸ポケットから中南海のジャケットが見え隠れしている。とても楽しそうに彼は申告したが、正直臭いのはこいつだけじゃない

い。

「みんな臭えなあ。」

藤澤くんもわかってるのだ。
灰を落としてまたそうばやいた。

いや藤澤くんだけじゃなくて、みんなわかってる。

臭いのは自分だってことぐらい。

ようやく鼻がなれた頃、吉田くんを混ぜて煙草パーティーが始まった。

他人の煙草をもらって吸ってみては、やれ臭いだの、やれ味がないだの、品評会のようなただのバカ騒ぎだ。
コーラの缶が一杯になった頃には、空腹だったのもすっかり忘れていたし、いつのまにか昼休みも終わっていた。

いろんな匂いが染み着いたカッターシャツは、それはもうくさかった。

2・バーチャルトモコ

吉田くんがトイレに行っている3分間で、屋上タンク裏で小会議が行われた。

散々バカ騒ぎしたあとに気づいたのだ。

今日の吉田くんの煙草が中南海で、いつもとちがうことに。

なんでなのか、と最初に言い出したのはわたしで、浮気説を立てたのは沖田。

それに尾ひれをつけて話を膨張させるのは藤澤くんだ。

「だから、まきちゃんが2人目なんだろう。」

「僕は3人目だって聞きました。」

「え、じゃあ、かなちゃんが2人目？」

「誰だよ、かなちゃんて。」

「1 - 3の髪長いかわいい子」

「じゃあ、そのかなちゃんが2番目、先週別れたというまきちゃんが3番目、一つ上の加藤先輩が4番目の女ってことだ。」

藤澤くんのまともに沖田とわたしは納得して頷いた。
でも沖田はすぐまた首をひねった。

「それで、本命は誰だ」

そこが問題だ。

まきちゃんと付き合っていた頃の吉田くんの煙草は、煙草嫌いのまきちゃんの為に、匂いのつきにくいマルメラだった。

別れたという噂が立ってから、まだ未練があるのか、メアドは変えても煙草だけは変えずにマルメラだった。

そんな彼がいきなり、

あの臭い中南海に変えたのだ。

新しい女の出現に違いない。

そう踏んで、何人かいる彼の”彼女ストック”をならべてみるのだが、本命だけがどうしてもわからない。

「藤澤くんは誰だと思う？」

「そうだな、…案外まったく新しい女、…クラブシンガーのトモコちゃん。22歳 162cm 50kg 上から89 56 85」

つらつらと話す藤澤くんは沖田とわたしはしばらく啞然として、ふと気づくと沖田が慌てふためいていた。

ヤバイヤバイと口パクで必死に伝えてくるので目線をずらすと、藤澤くんの後ろには、とても可愛らしい、まきちゃん。

「あの、慎一くんまだ来てませんか？」

「吉田は今トイレだからすぐ戻ってくるよ」

おそろしく冷静に、なに事もなかったかのように応答する藤澤くんは、ある一種の恐怖感を覚える。

「すぐに来てくれて言われたから、慌ててすっぴんで来ちゃって恥ずかしいんですけど、すみません」

えへへ、と恥ずかしそうに笑う彼女はすごく可愛らしくて、すっぴんだって全然恥ずかしくないくらい。

確かに急いで来たのか息があがっていて、頬も赤かった。

吉田くんは愛されている。

それもこんなに可愛い子に、こんなに一途に。

あいつは大したもんだと思った。

さっきまでの談義はバカらしい、止めだ、忘れようと思っていた。

「それで、トモコちゃんて誰ですか？藤先輩の彼女さんですか？」

まずい聞かれていた、とも思ったが、このまま藤澤くんの彼女つてことにしておけば大丈夫だろうと思い直すと、隣で藤澤くんが口を開いた。

「違うよ。僕じゃなくて、吉田の女。ていうか浮気相手かな」

新しい煙草に火をつけようとしていた沖田の手から、うさちゃん柄のライターが滑り落ちた。

わたしは後頭部を鈍器で思い切り殴られたかと思った。

まきちゃんは眉一つ動かさずに、

「もう、またですか慎一くんたら
などと言つてのけた。」

そうじゃないかな、とは思っていたんです。

妙な空気の中、まきちゃんは少しずつ話し始めた。

「最近慎一くんメールすぐに返してくれないし、5分おきに電話しても、全然出てくれないくて。」

携帯もロック掛かって、あ、それは別にどうってことないんですけど、メールボックスも着信履歴も全部真っ白だったんです。だから問いつめることもできなくて、どうしてやるうかと思ってたところなんです。」

でも証拠になる話があつて良かったです、と可愛い笑顔を見せたまきちゃんに、背筋が凍る思いがした。

沖田はかすかに震えている。

具体的に吉田くんはまきちゃんに”どうされる”のだろう。

わたしたちは明日いつもどおり彼とあえるのだろうか。

一抹の不安は頭をよぎっただけで終わった。

別にどうでもいいかと思ひ直したからだ。

「吉田遅いね、電話で呼びつけようか。」

悪魔はこの状況を楽しんでいる。

心なしか声が弾んで聞こえる。

空は青い。

ガタガタと立て付けの悪い音が聞こえると、タンクの影からひよこつと吉田くんが顔を出した。

銀縁メガネに太陽光が反射して、キラキラ光っている。

「まき、もう来てたんだ」

わたしたちの中にまきちゃんを見つけると、途端にすごく優しい顔つきになった。

メガネの輝きにも青い空にも負けないほどの光る笑顔だ。しかしこの男、妙な雰囲気気付かないのだろうか。」

慎一くん、とひとことつぶやいて、まきちゃんは腰を上げた。

その小さな所作にもいちいち沖田はびくびくしていた。

わたしは久しぶりに背中を変な汗が流れるのを感じた。

「慎一くんは、私とトモコちゃんと、どっちの方が好き？」

眉を下げて、スカートの端を握りしめて、搾りだしたような声でまきちゃんが問う。

問われた吉田くんは、ポカンとしていた。まるで身に覚えがないかのように。

しかしすぐに2、3回瞬きすると、まきちゃんの身長に合わせるように少し屈んで、まきが好き、と言い切った。

それをきいたまきちゃんは、「まきも慎一くんが好き」と、今日一番の可愛い笑顔で返した。

この茶番劇はなんなんだ。

悪魔に目をやると、さっきまでの笑顔はどこへ、至極暇そうに、新しい箱のビニールを剥がして、煙草に火をつけていた。

「ちょっと藤澤さん。まきは煙草嫌いなんですから、吸うならあっち行ってください、あっち！」

それを目ざとく見つけた吉田くんは、迷惑そうにあっちいけサインをだした。

藤澤くんは一瞥して、
へーへーと重い腰を上げた。

取り残された沖田とわたしは、目撃した一部始終を必死に頭で整理していた。

「…君ら別れてなかったの」

「別れてないですよ。誰の噂ですか、それ」

「中南海…」

「中南海に変えましたよ。さっきから吸ってたのに今更ですか？まきの前で吸わなかったら、臭いのも許してくれるって言うてくれ

「だから、ね。」

沖田とわたしの疑問が、次々解決されていく。

「新しい女ができたから煙草変えたわけじゃなくて？」

「やだなあ、まきがいるのになんで新しい女ができるんですか。」

それをきいてまきちゃん是一段と顔を赤くした。 吉田くんとな
いだ手を下の方で揺すっていた。

またそれに気づいた吉田くんは、つなぎ方を恋人つなぎに変えたり
した。

「じゃあ慎一くんはトモコちゃんとはなんでもないんだよね。」

「そのトモコちゃんて誰？」

吉田くんがこっちを向いた。

でもわたしも沖田もわからない。

ちょうど一服から帰ってきた藤澤くんを見る。

「え、知らない。」

だってさっきお前が、という沖田の抗議を聞くと、

「トモコちゃんは僕の中の吉田の女のイメージ」

悪びれもなくのたまった。

でもまきちゃんはそれをきいても怒るところか大笑いだったので、
まあいいかということになった。

吉田くんたちがデートに出掛けたあと、藤澤くんになんであのとき
あんな事を言ったのか聞くと、彼は、
「僕、もめ事揉ますの大好きなんだよね」
と言った。

藤澤くんについてわかったことがある。

彼はもしかしたら、
とても、いい性格をしているのかもしれない。

反省しても後悔しません（前書き）

反省文

2 - 8 4 番 沖田柊也

僕は昼休みにベランダで煙草を吸いました。
ごめんなさい。

次はばれないようにしたいと思います。

反省しても後悔しません

放課後、特に何か用があるわけではないのに、わたしは2階廊下をぶらぶら歩いていた。

ああそういえば。

職員室で三者面談の用紙をもらわなきゃならなかったことをふと思いで出して踵を返すと、真後ろに藤澤くんがいた。

あまりに近い距離に違和感を感じるが、それ以前にびっくりして言葉がでなかったりする。

「あ、振り向いちゃった」

彼曰く、もうちょっと歩いたら驚かすつもりだったらしい。

その前にいきなりわたしが振り向いたものだから、彼もびっくりした顔をしている。

「もしかして、つけてるの気付いてた？」

首を横に振ると、藤澤くんはすごく嬉しそうに、なんだ、と笑った。

「僕、多分またするから。」

「宣言するんだ。」

実は、あまりびっくりさせられるのは得意じゃない。

しゃっくりが止まらないときも、いつ驚かされるのかびくびくしているうちに、しゃっくりが止まっていることが多いのだ。

でも彼があんまり楽しそうに言うから、まあいいかと思ってしまっ。宣言された分、覚悟ができるから幾分かましだろう。

「あ、そうだ。浅木さん、これから教室戻る？」

「うん、職員室寄ってからだけど。」

「そつか。じゃあ教室に柊がいたら、先帰るって言うておいてもらっていい？」

「わかった。沖田と仲いいね。」

そう言うのと、彼はちょっと意外だという顔をして、そうかな、と言った。

仲いいよ、と返すと、またいつもの笑顔になった。
彼のこの笑顔がどうにも好きだ。

それから藤澤くんは時間やばいから、と小走りで去っていった。
わたしもクーラーのきいた職員室を目指した。

「教室に沖田がいるから、これ追加つつって渡しておいて。」

今日はよく頼まれごとをされる日だ。
クーラーのきいた職員室で、情けなくだれている担任に紙束を渡された。

400字詰め原稿用紙だった。

職員室を出て、またなんとなくの足取りで教室へ向かうと、廊下の窓ガラスはどこもオレンジ色だった。

斜陽はまだ眩しいぐらいの光を放っている。

まだ沈まないって言うように、
ずっとそこにあるようで、

いつのまにか、気付いたときには沈んでしまっている。

こんな夕方は好きだ。

立て付けの悪い教室のドアを片手であけるのは至難の業だ。
しかしそういうドアに限って、力を入れすぎるともの凄い勢いで開

いてしまうもので。

こいつも例外ではなくて、バァンと音を立てて一度バウンドしてから動きを止めた。

「うるせえな。もっと静かに開けらんない？」

「ごめん、片手間なのよ」

不機嫌そうに机に突っ伏している沖田に、預かってきた紙束をばさばさ揺らして見せた。

「なにその束」

「追加だつて。」

追加のひとことにあからさまに嫌そうな顔をする。

教室には沖田しかいなくて、さっきのオレンジの光が、同じように部屋を覆っていた。

机に近づくと、似たような紙束が積まれている。

「なにそれ、小論文？」

「ちがうちがう。反省文」

沖田はくるくるシャープンを回し続けている。

一時わたしも練習したけれど結局出来ず終いだっとなあ、なんてことを思った。

「なにやったの。」

「昼休みにベランダで一服してたら、ばれちゃった。」

なんでばれたかなあ、なんて言いながら、また顔を伏せた。
さらさら流れる黒髪が羨ましい。

キューティクルがオレンジの光で輝いて見える。

そりゃあんな人目に付くところで吸ってたらばれるだろう。

「藤澤くんが、先帰るって言ってたよ。」

「そっなん？あ、そっか。今日あいつバイトだ」

顔は上げずにそのまま声を出すから、こもって聞きとりづらい。

目線をずらすと、白紙のものにまぎって、黒い文字が見えた。

「僕は昼休みにベランダで煙草を吸いました。
ごめんなさい。」

「音読するなよー。」

「これだけ？」

「反省してないのに反省文なんて書けませんか。
続きは浅木考えてよ。」

「僕はとても反省しているので、」

わたしがなんとなく口に出したことを、沖田は真剣に書き留めている。

なんだかこれはとても面白い光景だ。

「だから次はばれないようにしたいと思います。」

「それはまずいと思います。」

しかも宣言するんだ、と沖田は付け加えた。
でも少し考えて、「めんどくさいし、これでいいや」とそのまま書いた。

「それで何行埋まった？」

「うん、3行。」

じゃあもついいんじゃない？、と聞くと、おう、とだけ返事をして座り直した。

「一本いかが？」

声に振り向くと、小さな箱をこっちに向けて、自分もすでに一本銜えている沖田がいた。

全くこりないな、
沖田も、わたしも。

いただきます、と手を伸ばすと、もう2、3本しか残ってないのか、
取りやすかった。

はい、と沖田が机の上に100円ライターを滑らした。

「あれ、うさちゃんじゃない」

「うさちゃん出張中」

ぷかぷか煙を吐きながら、沖田は目を閉じて至福の時を味わっていた。

わたしはその穏やかな横顔を見て笑った。

沖田はちよつと睨んだけれど、その顔もまたかわいく見えて笑った。

わたしも沖田もなかなか幸運だ。

こんな夕方の一服が格別なことを知っているし、なにより一緒に一服できる悪友が3人いる。

きつとなかなかないことなんだろう。

さっきまで眩しかった斜陽はやっぱり知らないうちに暮れてしまつて、もう外は真つ暗だ。
遠くの街灯の光と教室の蛍光灯、その間の紺色の空に煙草の煙が重なる。

窓を少しあけると、まだ熱のある空気につて白い煙が外に逃げていった。

紺色に白が溶けていく。

「やっぱりマルボロの味は慣れないなあ」

「そのうち慣れるだろ」

帰るか、と沖田が立ち上がる。
机の上を見ると、あれ。

「なにこれ」

「かいじゅう。」

大量の折り紙。

沖田の怪獣シリーズ。

何度か授業中に折ってるのを見たことがあるが、すごい細かい。きもい。

「沖田ってムダな才能あるよね」

「ムダっていうな」

余った原稿用紙が散乱している。
が、片づける気もない。

「沖田、チャリ後ろのつけて。」

「いいけどお前、ドアどんな開け方したんだよ。閉まんねえよ。」

「うそ、レール曲げちゃったんだ。どうしよう」

「お前、女としてムダな力あるよな」

「うるさいなあ。」

けけけつと特徴のある笑い方をして、沖田はドアに一発蹴りを入れた。

また派手な音を立てると、ドアは嘔みたいになめらかに滑るようになった。

感心して見ていると、

行くぞ、と手を引かれる。

まだ消えない煙草の白い煙が、夕方の廊下を泳いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0189j/>

怠惰少年期

2010年10月11日05時19分発行